

## 随筆

## リジエクシヨン・スリップ

吉田恭子

一九九七年ウィスコンシン大学ミルウォォーキー校の大学院創作科に入学したときは、小説技法を学びしかるのちにアメリカの「新人賞」みたいなものに応募するのかと想像していた……どころか、そんな日本の未来図でさえまったく想定していなかった。ただ「作家活動」にははつきりとしたスタートラインが引かれているのだらうと思ひ込んでいた。

トマス・ポントリー教授実家での感謝祭に招かれマディソンから戻る車中、創作ワークシヨップに提出した短篇を文芸誌に投稿してみても、と提案されてびっくり途方に暮れた。はじめてのワークシヨップの最初の作品、しかもどこにどうやって送ればいいのか。手順もなにもまったくわからない。

「まずは『ニューヨーカー』から始めなさい」

そう言われてさらにどぎまぎした。『ニューヨーカー』と言えば『アトランティック・マンズリー』『プレイボーイ』などと並んで文芸作品を掲載する一般誌の最高峰で、毎週一

篇ずつ、ジョン・アップダイクやアリス・マンローなどの短篇が載るのだ。

「リストを作り『ニューヨーカー』から順番に投稿しなさい」先生は「作家活動を実践学習せよ」と告げていたのであって、お前の短篇は文芸誌に載るだろう、と評価していたわけではなかった。だがそんなこと見当もつかない私は、毎年刊行される『ベスト・アメリカン・シヨート・ストーリーズ』シリーズの巻末にアルファベット順に並ぶ北米の文芸誌百誌から自分なりの番付を組んで、言われた通り順番に投稿することにした。

この巻末リストには当時住所も掲載されていて、創作科の学生のために編纂されたような、便利な付録だった。

電子メールは普及していたが、まだ紙の原稿を郵送するのが慣例だった。原稿のコピーに自己紹介を兼ねた挨拶状と返信用封筒を付して送る。

『ニューヨーカー』のように専属の読み手がいる雑誌は返事が早い。二週間ほどで一筆箋よりも細い短冊がひらり一枚返ってくる。リジエクシヨン・スリップ、すなわち「ポツ紙片」。「投稿してくれてありがとう。残念ながらあなたの作品は本誌の需要に見合いませんでした」。大きな雑誌だと立派に印刷された紙片だが、小文芸誌だといかにもコピー紙をハサミで切り分けた風情である。

『ニューヨーカー』の不採用通知が届いたところで本格的な投稿活動が始まる。学術論文ではありえないことだが、詩や小説ではこのころから同時投稿が認められつつあった。文芸

誌の数は多いし、学生が片手間にスタッフを務める所だとポツ紙片を受け取るまで三〜四ヵ月も待たされたりする。慣れとくると一度に五〜十誌に作品を送る。もちろん同時投稿であることを手紙で告げなければならぬ。どこになにを送ったのか記録も取っておく。これだけ四方八方に送りまくるとなんだかあやしい通信販売業を手がけているようだ。

仲間内でポツ紙片が話題になる。ポツ紙片にもグレードがあり、「ありがたい、ポツでした」から「また送ってね」と再挑戦を促すもの、下読み係でなくフィクション・エディターや編集長のサインが入ったもの、手書きの感想がひと言書き込んであるもの。そして最上級はポツ書簡。紙片ではなく便箋に、投稿を感謝することばとともに詳細な講評が書かれ、ぜひ次回作も本誌に投稿して欲しいと編集者のサインで結ばれる。

ユースタス・テイリーの横顔レターヘッド付きポツ書簡が『ニューヨーカー』から届いたりすれば、仲間にも自慢し励みとして大切に取っておく。ポツなのに。

はじめはポツ紙片一枚一枚にへこんだが、徐々にこれがアメリカで小説を出版するための基本作業だと開き直った。エージェントがところが、賞をとろうが、誰もが投稿そして投稿、なのだ。

まだそんな事情もわからぬまま手探りで投稿を始めて間もなくのところ、ニューヨークの文化雑誌『ヴィレッジ・ヴォイス』の文芸別冊『V L S』からポツ紙片が届いた。最低限「残念でした」と印刷された短冊。そこにシワシワ

の二十ドル札が三枚同封されていた。メッセーじもサインもなにもない。

あまりに不可解だった。これってよくあること？ 日本のまんがスクールの奨励金みたいなもの？ とにかく文芸出版事情に疎すぎてどう反応すればいいのかさえわからない。なにもできずに放っておいた。

もやもやするので教授に相談した。ポントリー先生は「自分が最初にもらった原稿料より高額だ」とニヤリ。シラー・ロバーツ教授は「皆目見当がつかないけど、お金は取ってあげば？」と言う。

どうやら稀な事態らしいと悟ってクラスメートらに告げると「作家見習いに励ましの募金？」「隠しておいたドラッグマネーが誤送された」「読んで笑ったけど、ごめんやっはポツだわ料」など次々と仮説が生まれたが、なんの解決にもならないのだった。個人的お気に入り「その日たまたま百万長者が編集部を訪問してすべてのポツ紙片に六十ドルずつ大盤振舞をした」説。シワシワのお札をばらまく「百万長者」がそこはかとなく貧乏くさい。

結局六十ドルはありがたくいただき、さらなる投稿の切手代に消えた。

一年ほど経った後、いったいぜんたいあれはなんだったのか心当たりのある方は当時の経緯を教えてくださいという手紙を『V L S』に送った。返事はなかった。

最初の短篇が文芸誌に掲載されるまで私はポツ紙片を五十二枚収集した。初原稿料は掲載誌五冊だった。